

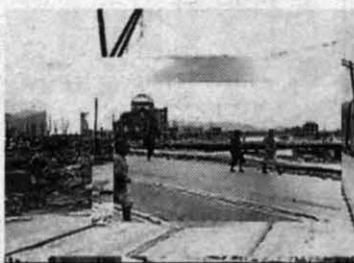
# なぜ「戦争」を伝えるのか

ドキュメンタリー手法で実像に切り込む

## 2映画監督に聞く



フランス ペリオ監督



映画「二十万の亡霊」の一場面。原爆ドームをとらえた写真を積み重ねた映像が続く

校では広島・長崎への原爆投下は簡単にしか触れられず「何も教えられていないに等しかった」。

き、テーマの深さと重さにたじろいだ。同時に国境を超えて欧州の人々に感動を与える伝え方にも悩んだ。

「黙して語らない」原爆ドームに焦点を絞り、ドームと周辺の風景の移り変わりをたどることで失われ

た。被爆から62年。毎年、原爆に関する映画作品は数多く作られ、マネリを生んでいるという見方さえある。

だがペリオ監督は言う。「核兵器という人類共通の問題に世界の人々の関心を高め、行動を促すために

## 核問題 新たな視点も必要

パリの映像プロダクションに所属するペリオ監督は今年、原爆投下をテーマにした小品「二十万の亡霊」(10分)を制作した。

写真約千枚をアニメーションのコマ撮りのように積み重ねて表現した、例のない作品だ。建設から破壊、復

3年前、たまたま古本屋で被爆者の証言集を手に取り、被爆者が現在も後遺症に苦しんでいることに衝撃を受けたのがきっかけだった。

爆風と熱線にさらされながら生き残ったドームの前に初めて立ったとき、内戦の傷跡が残るサラエボ(ボ

スニア・ヘルツェゴビナ)を訪れたときと共通の印象を持ったという。「徹底的な暴力を受けた過去と現在の衝突のなかで街が形成さ

1915年に広島県物産陳列館として開館し被爆で廃虚になった原爆ドームの約90年の歩みを、スチール

物」であるかのように見え、欧州のテレビ局で放映された反響を呼び、各地の

保有国であるフランスの学

人以上に犠牲になった原爆投下に向き合い始めた

ある」